



TITLE:

初期フローベールにおける「身体」の変容:1837年～1842年

AUTHOR(S):

加納, 由起子

CITATION:

加納, 由起子. 初期フローベールにおける「身体」の変容:1837年～1842年. 仏文研究 2000, 31: 29-46

ISSUE DATE:

2000-09-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/137909>

RIGHT:

初期フローベールにおける「身体」の変容

——1837年～1842年——

加 納 由 起 子

序に代えて：フローベールと神経症に関するテーマ批評について

フローベールとその神経症というテーマは、フローベールが体系的研究の対象となった20世紀初頭以来、文体論や伝記的研究と並んでフローベール研究の主角をなすものである。しかし、このテーマは、1844年の発作そのものに限るにせよ、作家の人生という長期的スパンにおいて見るにせよ、作家個人の内的体験として完全に扱うことが非常に難しい、はっきり言ってしまえば不可能なテーマである。19世紀の作家たちは全て多かれ少なかれ、心身の病的状態に関連して人間を描こうとしているのであり、病理学がこれほど文学に近かった世紀はない。また、フローベール自身、病院を幼少年時代の背景として解剖研究用の死体を間近に見て育ち、生涯人体の知識に異様な関心を持ち続けた作家である。よって、フローベールと神経症のテーマは、フローベールと19世紀における医学史と平行して論じられるのが常であり、また自然なことでもある。

「神経症」に注目したアプローチは古く、マキシム・デュ・カンが、フローベールの死後すぐ『文学的回想』の記述によって、その「癲癇 (épilepsie)」を暴いた時に(1881年)始まるとさえ言える¹⁾。その後、シャルパンティエ社によって部分的ながら『フローベール書簡集』(1884年)が刊行されたおかげで、それまで近寄りがたかった「クロワッセの隠者」に人間的魅力が加味され、そして19世紀末の一般思想が神経性疾患(大きく言ってヒステリー)の科学的及び、人道的解明へと意気高く進行していたことから、デュ・カンが多分に18世紀的な忌避の反応を見込んで洩らしたフローベールの「癲癇」は、「神経症 (névrose)」と翻訳された。その後20年も経たないうちに、フローベール旧医学生説がまことしやかに語られるようになる。20世紀初頭はまた、フローベールの「神経症」に関して多くの医者から死後診断が集まった時期でもある。自ら医者であるルネ・デュメニル著の『フローベール、その遺伝、その環境、その手法』(1907年)は、医学的見地から作家の神経症発作に光を当てようとした博士論文であり、このテーマ研究では古典である²⁾。レオン・ドーデからアルベール・チボーデに至る時代の文学研究者たちは、サント＝ブーヴが1857年にすでに『ボヴァリー夫人』に読み取った文体の解剖学的風貌への思索を深め、そこにフローベール＝人間の心身の疾患を熟知した医学者の作家、という構図を確立する。どの

批評家も、研究者もフローベールと医学のつながりに注目していたとすれば、そこには作家の神経症の事実が公然となったことへの反応が見て取れよう。かくして、往年の「神経症」は、作家の死後その地位の顕揚にいささかなりとも貢献したと言わざるを得ない。同時にそれには、テーヌやブルジェの歴史哲学が、19世紀文学を論じる上での方法論として提示されたことも大きな影響を与えたであろう。

1960年代には「現代小説（ヌーボー・ロマン）の始祖」として復活したフローベールだが、サルトルが、その自伝とも伝記ともつかぬ『家の馬鹿息子——1821年から1857年のフローベール³⁾』によって、フローベールの初期作品における神経症の前兆と後遺症を分析した時には、すでに作品研究と作家研究は、少なくともフローベールに関してははっきりと分かれるようになっていた。サルトルの著書はフローベールの神経症を、精神分析の対象としては非常に害の少ない、ほとんど平凡な、家庭環境と性格の不一致の問題に還元してしまった。しかしその反面、ビシャ派直系の外科医であった父アシル＝クレオファースの学業について言及し、少年ギュスターヴの人体への視点にその影響を指摘したことは、その後の伝記研究に決定的な影響をもたらしたと言える⁴⁾。同じ頃、ミッシェル・フーコーが、カンギレムによる科学史の教えをもとに、いわゆる「大病院時代」として知られるナポレオン帝政下に始まる19世紀前半の医学思想について、ブルッセイ、ピネル、ビシャの文献に当たりながら進めた考察、『臨床医学の誕生』（1963年）を発表した⁵⁾。フーコーがその前後に書いたエッセーとともに、この著書は今でも、19世紀リアリズムとナチュラリズムに関する「エピステモロジックな」文学研究のバイブルとして確立している。サルトルによって示唆され、フーコーが手本を示したこのアプローチは、社会学的批評と一線を画しながら、現在新しい興味を惹いている領域を暗示している。

本文では、神経症に出会う以前のフローベールの身体意識について述べたい。サルトルが神経症の「前兆」を探したこの時期において、フローベールは身体認識の多くの問題に既に解答を与えているのである。

1. 「身体＝物質」の定理

従来「初期作品」として分類されているものの年譜をたどることから始めよう。フローベールが自ら「作文（composition）」と呼んだフィクション製作は、1835年（13歳）に始まり、15歳から16歳にかけての1837年において本格的なものになる。つまり、ジャン・ブリュノーが博士論文『フローベールの文学的出発』（1962年）で「哲学コントサイクル（cycle philosophique）／自伝サイクル（cycle autobiographique）」と類別したこの時期より⁶⁾、フローベールの試作には余人のものならぬ彼自身の思考の動きが現れるようになる。1838年から1839年（16歳から17歳）は、有名な『狂人の手記』の年である。1840年から1842年（18歳から21歳）には最後の自伝的作品『11月』が完成し、1843年から1845年の間（21歳から23歳）には最初の「3人称体小説」、初稿『感情教育』が出来上がる。1869年の同名のものと量的に差のない大作である。その執筆期間のちょう

ど半ば頃、最初の神経症発作がフローベールを襲う。1844年1月も半ばのある夜、ドーヴィルに向かう途中、兄のアシルと一緒に馬車の御者台で手綱をとっていたフローベールは、ボン・レヴェックでいきなり意識を失い、馬車から転落したのだった。この前数ヶ月は学業のため、この後数ヶ月は病後養生のために草稿に手を触れていないフローベールだが、完成した小説にこの事件は深く影を落とし、前半と後半で明らかに書くことに対する態度の変化が見られる。以上が「初期作品」群の大まかな背景である。ブリュノーの論文以来、「初期」と言えば1831年から1845年を指すのが定説であるが、今回は、1837年から1842年までを「身体」に関するテーマがほぼ出揃った時期として、一区切りとする。

1837年における変化は、「物理的にそこにあるもの」としての身体の記述に固執しながらも、フローベールの視点が死体から次第に生きた体へとずれていくところにある。1837年前半に書かれた、幻想コント『地獄の夢』はこの視点の転機を示している。

まず1837年以前の作品には22篇のコントと短編小説が数えられるが、そのうち実に15篇が死の具体的、或いは抽象的イメージをを描き出している。死体或いは、瀕死状態の身体の写実的記述はこの時期、フローベールが異様なまでのしつこさで繰り返している手法である。「水から死体を引き上げたところだった。汚れた花で飾ったレースのボンネットをかぶった女の死体だ。ほろほろになった洋服の間からやせ細った手足が見えた。死体のまわりには蠅がぶんぶんいいながら群がり、半ば開いた口の凝結した血を吸っていた。その膨れ上がった腕は青みがかった色をしており、黒い染みに覆われていた。[……] 至るところに傷や爪痕がついたその死体は、膨れあがり、緑がかった色をしていて、死体安置所の濡れた床の上に置かれている様は、恐ろしい、胸の悪くなるような眺めだった⁷⁾」(『この香を嗅げ』, 1836年) や、「ベッドの上に横たわったその死体は裸だった。その傷痕からはまだ血が滴っていた。顔は恐ろしくこわばり、開いた目がガルシアの方を向いていた。暗い澱んだ死体特有のあの眼差しを見て、ガルシアの歯はがちがちと鳴った。死体の口は半ば開いており、何匹かの肉蠅がぶんぶんいいながらその歯にまで吸い付いていた。5, 6匹は死体の頬の凝結した血に張りついて動かなかった。死体の肌の色は不気味に青ざめ、爪は真っ白になっており、腕と足には打撲傷が見えた⁸⁾」(『フィレンツェのベスト』, 1836年) など、同種の例は枚挙にいとまがない。これらのイメージは、その頃熱中していたデュマやスコットの歴史小説、ホフマン流派的幻想小説の影響を受けた血と惨劇に対する文学趣味に、フローベールが父の病院で長年見知った死体のイメージを重ねあわせて書いたものであろう。フローベールの「死体との奇妙な親近性 (l'étrange familiarité avec les cadavres)⁹⁾」についての考察は本文の内容から外れる。ここでは、ごく初期のフローベールにとって、死体はまずグロテスクな物体として怪奇趣味の格好な小物であり、生と死を連想させる題材として一種の擬似哲学を語る口実でもあった、とだけ言っておこう。

ゲーテの『ファウスト』とエドガー・キネの『アハシュヴェロス』に触発されて書いた『地獄の夢』は次のような物語である。何事にも情熱を感じず、無為に暮らすアルチュール・ダロマロエス公爵のもとにある日悪魔が現れ、彼に魂(愛情)があるかどうか試そう、といういわば賭けを申し出る。アルチュール=物質としての純粋な肉体、悪魔=非物質の存在(esprit)という対

立構図で、このコントの話と論理は進んでいく。悪魔が常々悩んでいることは、彼には肉体 (corps) が無いため、全ての官能と情熱の喜びが理解できない、ということである。

体？ ああ、そうなんだ！ 触れて感じられるもの、目にみえるもの、だって俺は形でしかない、吐息でしかない、見せかけにすぎない！ ああ、もし俺が人間だったら、あんな広い胸やたくましい腿を持っていたら！ 俺は人間がうらやましい、憎い、妬ましい。ああ、俺には魂しかない、この焼けつくような不毛な吐息、我と我が身をむさぼり引き裂く吐息しか。[.....] 俺は物にさわれない、つかめない、[.....] 何度、若い娘のまだ暖かい死体の上をさまよったあげく、絶望し、呪詛を吐きながら戻ってきたことか！ まだしも俺が猛獣だったら、動物だったら、爬虫類だったら¹⁰⁾！

生と死、魂と身体という、フローベールが常用する観念の対立構図は、それまで平行に並び、精神による生きた肉体の否定という安定した論理構造を作ってきたのだが、ここで二つの定理が複雑に交錯し始める。「肉体」対「魂」というキリスト教的対立構図と、「物質主義」対「精神主義」のロマン主義的対立は混同されている。同時に魂の対語としての「肉体」と、精神の対語としての「身体 (物質)」は、それぞれの対概念の曖昧さに引きずられながら、この小説の中ではますます不明な言葉になってゆく。一方フローベールは、そうした言葉自身の曖昧さを越えて「肉体」には生命が宿っていると感じ取った時、今までの観念対立の操作では扱いきれない対象に気づいたのである。魂でも精神でもないこの生命こそが、フローベールがこの時点で捨象しきった問題の核心といえるだろう。悪魔の言葉は、人間の「魂」を乞い求める存在のそれではない。その無力の叫びは作者の言葉である。「否定の否定」とは、この文章に対するサルトルの解釈であるが¹¹⁾、フローベールが常に同じ論理の中に閉じこもっていると想定するのは、表面的な解釈であろう。悪魔の叫びを通して、フローベールの目は自己内部に向かっており、自分の目を介した別の論理を探しているからである。

最終的に、アルチュールと悪魔の間には掴み合いの闘争が起こる。フローベールの筆力はこの闘争を具体的に描くに及ばず、精神と肉体の対立を抽象的なぞるに終わる。精神はついに、「居丈高にそびえる、この粗野で愚かな死体置き場 (morgue)」の前に倒れる。身体 (corps) はその「耐久性 (patience)」をもって、魂を屈服させる¹²⁾。例えば、「死体のうつろな半ば閉じた目が彼の犯した罪を糾弾しているように見え、アンリはその前でおののいた¹³⁾」(『ド・ギーズ公の死』, 1835年) という記述に見られるような、フローベールにとって死体の本質的性格であった恒常的な無言の存在感は、ここでは「耐久性」として、生きた身体 (corps) の物質性を表す言葉となっている。生体と死体は、物体としての身体として無理に同一視されている。

「身体 (corps)」の一般的語義は、リトレによれば「生きている、或いは死んだ人間及び動物の物質的存在 (existence matérielle)。[.....] 魂との対立においては、人間を構成する感覚部分 (partie sensuelle) を指す¹⁴⁾」。ブランヴィリエは「身体を単位として、ある性質表象の総体 (un tout) が構成される。これはすなわち、個体 (individu corporel) と名づけられるところの実体

的広がり (étendue solide) の一形態である¹⁵⁾」と演繹する。そして、マッソン・アスラン社共編の『19世紀医科学大百科辞典』(1864～1889年)は、多様な文脈に共通する corps の一般概念を与える。同辞典は「corps の語は、物質 (matière) という語と混同される。よって、corps を定義するということは、とりもなおさず、matière という語の本質的及び、根本的な性質を定義することである」とした上で、matière / corps の基本性格を「一定の広がり、不可入性、慣性 (étendue, impénétrabilité, inertie)」とする¹⁶⁾。言うまでもなく、フローベールが問題無く受け入れたのは、三次元的な限界としての「身体」認識である。『地獄の夢』で、対象が死体から生体に移った後でも、フローベールの視点は、身体＝物質の「一定の広がり、不可入性、慣性」という性格に釘付けになっている。

この後も、死体の不動性によって身体＝物質の定理を保証し、そのために死という不可侵のアポリアを維持しようという傾向はフローベールを去らない。『11月』(1840～1842年)では、「過ぎ去った若い日」を回想する語り手がこう言っている：「僕はいつも死を愛してきた。[.....] かつては、死ぬとはどういうことか知りたいがためだけに死のうとしたものだ¹⁷⁾」。しかしながら、論理の帰結としての「死」の認識は、すでに概念形式への執着にすぎない。1838年のフローベールの感性は「身体」にすでに生命をかき分けており、その知性は新しい身体認識の形式を作ろうとして止まない。ここに「苦悶」が現れる。

1838年4月に書かれた『苦悶、懐疑的思考』は、アフォリズム風のノートである。ここには、身体＝物質の対立にまつわる語彙や観念から脱皮できない状況と、新しく生まれ始めた身体或いは生命への視点との矛盾を、苦痛(「懐疑」)として、より意識的に捉える目が現れている。「魂の中に死が入り込むたび、[僕が] 高い所から落ちるたび、カードで造った城が崩れるように幻想が破られるたび、つまりは [.....] 外側の人生 (vie extérieure) の下を、何かつらい、じたばたと動くものが通り過ぎるたび、[僕は] 叫び、泣いた¹⁸⁾」。「自分の内部に動く力¹⁹⁾」を、目にみえる物質としての身体において、客観的に描きだそうという努力は以下にもうかがえる。

先日、死体を掘り返している所を見た。死体はある高名な人物で、その断片を別の場所に移しているのだった。[.....] 男が見えた。人間のあらゆる恐ろしい状態を呈している男が。しかし、濃い蒸気が立ち上って、一瞬その姿を隠した。死体の腹は虫に食われ、胸と腿の部分はべったりと真っ白なものに覆われていた。近寄ってみると、その白さはおびただしい数の蛆虫がががつと男のからだを食っているのだと分かった。[.....] 墓掘り人夫は躊躇せず、その汚い肉を腕に抱えあげ、少し離れた所に停まっている車にまで運んで行った。人夫が急いだったので、死体の左腿が地面に落ちた。人夫は力んでそれを拾い上げ、背中に担いだ。それから墓を埋めに戻ってきた。そこで何か忘れていたことに気づいた。頭を忘れたのだった。人夫はその頭の髪をつかんで持ち上げた。死体の半開きの目は凝んでおり、粘ついた冷たい顔の頬が見え、蠅がその目を食っていた。その眺めは恐ろしいものだった²⁰⁾。

物質としての身体（死体）に「人間のあらゆる恐ろしい状態」、つまり腐食という、死後人体が自然から蒙る変化（動性）が加えられている。しかし、死体には喚起力はあるとしても、死体自身は生体の苦痛の感覚を持たないため、フローベールが「身体」に感じた生命の動きを表す媒体とは決してなり得ない。そして、視点と対象が完全にずれてしまう。対象が変化しているのに、観念的対立を軸として語りを進めていくというフローベールの弁証法的態度が変わらないことによって、表現が自己撞着を起こすのである。リュシー・シュヴァリー＝サバティエは、フローベールの独白の中でこの時期、伝統的な形而上学への懐疑とその反動としての神秘体験への憧れが頂点に達していることを指摘して、「1838年の危機（la crise de 1838）」と呼んだ。この「危機」は、真の関心対象（自分及び、他人の生ある肉体）を理解し、表現しうる言葉の不在という苦悶につながるように思われる²¹⁾。上の引用は一見フローベールの醜への病的な固着を示しているようである。しかし、同じテキストにおいて彼の追っている問題が、物理的身体の背後に直感的に見えているものによって死と生という観念的対立形式が崩れていく不安であることに照らせば、上の引用は、「身体＝物質のあらゆる特徴を備えた死体」のうちに、死の総合性と生の動きを同居させようとする、緊張した努力の結果なのだ、と言える。或いは、従来の「身体＝物質」の形式に主観（生の感覚）を導入するための妥協的手法とも言えるかもしれない。その少し前に書かれた『汝何を望もうとも』や『情熱と美德』（1837年）では、主人公が絶望の余り殺人、自殺にいたる経過は書かれていても、死体はほとんど描かれていない。初期におけるフローベールの死体描写熱がこの文章をもってほぼ終わることでも、この文章がフローベールの意志及び手法の限界を示していることが分かる。

4年後の1842年に脱稿した『11月』を見てみよう。この小説は1人称の語り手（フローベール）の独白で始まる。中盤で、語り手は娼婦マリーと出会い、別れる。最後に「草稿はここで終わっている、私はこの作者を知っていた²²⁾」という台詞で、2番目の語り手が登場する。2番目の語り手は、最初の語り手がどのように孤独と倦怠に生き、死んだかを語る。最初の語り手「僕」は心と体の理想に深い幻滅と絶望を覚えていたが、「自殺しなかった、まだ生き続けた²³⁾」。

ついに去年の12月、彼は死んだ。ゆっくりと、少しづつ、思考の力のみで死んでいった。どの器官（organe）も病に侵されたわけではなかった。[.....] 彼は生きたまま埋められるのを恐れて、死体を開いてくれるよう言い残した。しかし、防腐処置は施さないように、と²⁴⁾。

「身体（corps）」は「器官（organe）」に言い換えられ、解剖と埋葬の暗示がある。1842年、この自己パロディー化によって「身体」表象の努力を見捨てたかに見えるフローベールだが.....。

2. 「個」としての身体へ

先に述べたように、初期のフローベールにとって、身体 (corps) という語の持つ観念的支配力は強く、フローベールの試行錯誤の範囲を越えたものであった。フローベールは、その語義範囲の限界において、自分の関心の対象となっている事象に接近しようとする。それには2種類のアプローチを取る。第一に、内省を想像の力で濃縮することによって、自分自身のうちに望むような身体感覚を呼び起こそうとすること、第二に、身体 (corps) を「個体、個人 (individu)」と変換させること。まず、第一のアプローチを見てみよう。

[.....] 僕には、断食をする人たちが空腹を楽しみ、食を断たれたことに悦楽を覚えていることは良く分かる。それは、もうひとつの悦楽よりずっと洗練された一種の官能主義なのだ。心の愛欲、震え、至福の状態なのだ²⁵⁾。

これは、1839年から1841年までフローベールがその考えを断片的に綴り、姪のカロリーヌ・コマンヴィルが1931年、『思い出、ノート、内なる思考』と題して発表したノートの一文である。『11月』の次の文章につながるだろう。

僕は苦しみの中に自己満足を見出していた。そこから抜け出ようとする努力はもうやめていた。自分の傷を引っ掻き、爪に血がついたのを見て笑い出す病人と同じように、絶望しきった喜びを持って僕はその苦しさを味わっていたといってもいい²⁶⁾。

苦しい状態における自己満足、つまり自己の凝視（「自分の哀れな状態の見物 (le spectacle de ma misère)」）はかえって古い形而上学を呼び返し、結論として、フローベールは「僕らはみんな体 (corps) の中に死の萌芽を持ち、心には死の欲望を抱いている²⁷⁾」と言う。論理立ては、死と永遠という虚無主義的前提に舞い戻ってしまう。上記のような内省によって始まる身体感覚の想像は、またしても、「永遠」と「虚無」に関する紋切り型の弁舌を刺激し、「物質の性質 (nature physique)」と僕の間に、嘆かわしい調和が成立する²⁸⁾」に終わる。『11月』では性の欲望と他者との邂逅の夢にさいなまれた語り手が、娼婦マリーに出会い、二人は「同じおののきと同じ抱擁の中で」愛し合う。語り手は、自分と相手の興奮を出来るだけ見極めようとするのだが、その観察は視点を失い、対象を見失う。「僕は自分の心臓の鼓動を聞き、神経の震えの名残を味わいながら、しばらく呆然としていた。その後、全てが静まり、消え去っていくに思われた²⁹⁾」。

かつて僕が作り上げ、その時呼び起こそうとしていた空想の世界が、味わったばかりで生々しく覚えている感覚の記憶に混入した。そこで、幻と肉体、夢と現実の全てが交じり合った。今別れてきたばかりの女は、過去がそこで凝縮し、未来がそこから始まると

いった、総合的な姿で僕の目の前に現れた³⁰⁾。

自己観察や分析がすぎると現実の瞬間において同時的感覚が味わえない、という誰しもが経験したことを、フローベールは失敗の意識として切実に受け止める。「記憶は薄れ、心象は消えていく。身のうちに残るのは消し難い苦痛の感覚だけだ³¹⁾」。「身体」表象におけるこの閉塞状況は、生命という対象を、自己と他者、現在と過去という対立図式で説明しようとしていることから生まれるものであろう。真の対象、仮の対象、及び既成言語の間に、またしても葛藤が生じているのである。フローベール自身、身体認識と自意識の問題を同一レベルで語っており、そのため諸批評家は（サルトルを含め）、フローベールにおけるこの時期最大の問題は自我の二重性（*dédoublement de soi*）であったと解釈する傾向がある³²⁾。しかし、フローベールの関心は、間違いなく生きた「身体」へと向けられているのであって、自分の体感にこだわるのは、感覚が媒介となって「身体」という内部世界が開かれるものと想定しているからである。このことは上の一例でも明らかであるように思われる。

「物質（*choses physiques*）や生の動き（*vie active*）についての微妙な直感（*inspiration*）」は「理性的判断（*raisonnement*）より正しい³³⁾」という、1839年末から1840年始めにかけて生まれた確信は重要である。その確信は常に、「書くべきことがどうあるべきか感じられても、ここにはこれが来て、ここにはあれが来るということが分かっている、さて感覚を目覚めさせるような（*éclore*）画面を作るということになる、いつも無力に襲われる。この無力感を書く者を絶望に陥れる³⁴⁾」という問題にぶつかる。フローベールのジレンマは、初めから、ある確かな心象が過誤に満ちた言葉に抵抗することで生まれてきた。しばしば指摘されるフローベールと言語（*signifiant*）との特異な関係³⁵⁾はさて置き、「直感」や、「書くべきことがどうあるべきか感じられる」ことが表現に先行していることに留意しよう。

他方、「物理的な限界」の身体に、「個」の持つ特質を重ね合わせるアプローチはどうなるだろうか。以下は、『汝何を望むとも』の主人公ジャリオ（人間とオランウータンの交配実験から生まれた子供）の身体特徴を記述した一文である。

彼は小さく痩せた、虚弱な体をしていた。力の強さを表すものとしては、その2本の手だけであった。短いつぶれたような指には、半分矢なりになった頑丈な爪がついていた。体のその他の部分については、実に弱々しく発育不良であった。体は悲しい物憂い色に覆われ、早くに倒された木が葉をつけずに成長するような、こんなに若くから墓場に行くために生まれてきたようなこの男を見て悲しまないものはなかったであろう。[.....] 大きい口からは、[.....] 長い白い2列の歯が覗いていた。前方が詰まって狭く、後方に著しく発達した頭をしていた。少ない髪が皺のよった禿頭を見せていたの、この特徴は難なく見分けられた³⁶⁾。

独特な人格を象徴するような肉体が、静物描写と同じ精密さで書かれている。そこには、虚弱

さと暗い情念の力の混交がすでにうかがえる。ある「個体」に包含される矛盾が描き出されて初めて、「身体」は生命を持つように見える。

もし、その黒く厚い皮膚を覆っているシャツを開いてみたら、そこには競技者のような広い胸が現れたであろう。彼の大きな肺は、毛深い胸の下でたっぷりと呼吸していた。ああ！彼の心もまた、広大だった！海のように広大で、孤独のように果てしなく、空虚だった！³⁷⁾

続くこの部分は、「胸の広さ」という身体特徴を、「心（夢念の力）の大きさ」の換喩としている。人物の記述はここで身体（corps）の領域を超えるが、「個体」はそれを難く受け入れるのである。2ヶ月後に書かれた『情熱と美德』の主人公である、不倫の人妻マッザもまた、「比類なく強烈で、厳密に特殊な『本能』によって個別化された個人（personne）³⁸⁾」（サルトル）である点で、共通しているようである。

マッザの中には、火と熱、果てしのない欲望、甘美と愛欲への枯渇が渦巻いていた。それらは彼女の血に入り、血管を巡り、肌の下に潜り込み、爪の間にまで侵入し、マッザは狂ったように酔いしれた。この愛が自然の境界（les bornes de la nature）の外へ出ることが出来たら、と思うのであった³⁹⁾。

「自然の境界」とは、身体（corps）の物理的限界のことであろう。マッザの情熱は、体という生物的境界を破るほどその身体に充満しているのである。すでに述べたように、『汝何を望むとも』と『情熱の美德』は、情熱殺人と自殺をテーマにしながらも、死体の記述をほとんど含まない。ジャリオは、なぶり殺したアデルが「じっと動かず、冷たくなっているのを感じているうちに、[.....] 彼女をいろいろな方向に動かして⁴⁰⁾」みるだけであり、マッザは単に、「警官が彼女に近寄った時には死んでい」る⁴¹⁾。死体にはもはや何の喚起力もないのが明らかである。情念とそれに対する生物学的限界のふたつをもって人間の総合的存在が成立する。人体の物理的限界という共通点において「身体」が「個体」に変換したことにより、死体は生きた体にその座を明け渡す。生命と分析可能な物質の性格はもはや相容れないものではなくなっている。「個体」とは個人であり、その体熱と情念である。

これら一連の試行錯誤を経て、フローベールは「身体（corps）」という語を万能の語として扱うことをやめる。身体は「個体」という代替物を得て、物質性と生命の両方を確保したと言える。『11月』の末尾に死体＝物体＝身体の構図の破棄をみるのは易しいが、そのためには、フローベールにとって「身体（corps）」が持つ特質を「個体」に移し替え、変換することが必要だったのである。「個」及び「個人」と、その複合性及び統一性は、フローベールの生涯にわたって、その認識の土台であり続けるだろう。

3. 「生 (existence)」の形式

「クリスタルのグラスの中で泡立つワインのように、[僕の体には] 熱い血が鼓動する⁴²⁾」とフローベールが言う時、身体の生物学的限界がそのまま生命の入れ物となり、表現に形を与えていることが分かる。この点に依拠して、フローベールの関心の対象は、「個体」の情念部分から、外延して「個人」を形成する生命そのものの動きへと広がる。1840年から41年において、一瞬、解析を離れた生命の「直感」が彼の前に姿を見せるようである。一方、ケースバイケースの「個」はいまだ、観念として不確定である。

1839年の『狂人の手記』では、「直感」の対象はまだ「出口のない暗闇」、すなわち体と魂の二元論が「虚無」とする論理によって翻訳されている。「個体空間」はまだ、生命の機構として現れていないのである。

風にもまれる落ち葉や野原を横切っていく川の流れを見つめ、物 (choses) のうちに生命 (vie) が押し寄せ、沸き返り、人間が生き、善悪をなし、海の波がうねり、空が光を回転させる様を眺める者はこうつぶやくであろう：「[.....] どうして生命自身 (la vie elle-même) が、死という限界 (bornes de la mort) すらも超えて [.....], こんなに恐ろしい怒濤であるなんてことがあるのだろうか？ [.....]」この疑問は出口のない暗闇に我々を導く⁴³⁾。

2年後の『11月』ではその翻訳はもう成り立たない。「虚無」は、生 (existence) の定かならぬ「創造の営み (création)」として現れる。

人生 (existence) を生きないまま、人生の方が僕を侵食して行った。夢は重労働よりも僕を疲れさせた。何かしら創造の営み (création) の全体が、身動きせず、それ自身にも知られないまま、僕の人生の下に黙々と生きていた。僕は、それ自身発願の方法も形態も知らない、豊かな数知れない原理に満ちた、眠ったような混沌だった。それらの原理は形 (forme) を探し、型 (moule) が与えられるのを待っていた⁴⁴⁾。

「死という限界」観の変容は明らかである。「個体」が「身体」に代わる入れ物であるとするなら、その内容は「創造」や「生」の言葉で置き換えられる。しかし、それらの言葉では彼の見つめる「混沌」は目覚めないようである。

『汝何を望もうとも』、『狂人の手記』、『11月』における、抽象観念や自然のイメージを前にしたフローベールの「茫然自失 (hébétude)、失神状態 (pâmoison)、麻痺状態 (léthargie)」について、サルトルは「動物状態における充実」への傾向という解釈をほどこした⁴⁵⁾。確かに、「僕の心はこの永遠を想起させる情景の前で、深淵の中に沈んだ (s'abîmer)⁴⁶⁾」とフローベールが

言う時、上に引用に見るような生命の「混沌」に対する彼の受動的姿勢と共通するものがあるように見える。サルトルはここに、「もともと受動的に組成されたフローベールの自我」が真の演繹に対して不能であるため、「全体化 (totalisation)」を志向する、というプロセスを読み取った⁴⁷⁾。なるほど、「混沌」の前で手をつかねて受動的な立場にとどまるフローベールであるが、その直感の前段階として、これまで見てきた思索があることを忘れてはならない。「創造の営み」が、ものに、身体に、自然に存在することだけが、ただ受動的に感じられているのではない。強い知性の力が、直覚と「個」の思索を通して、生命そのものに観念的総合ではない「形」を与えようとしているのを見なければならない。

1841年初頭、フローベールはこう反省する。

[.....] 僕はいつも全てを言いたがる。僕はいつもひとかたまりで、総合として理解し、感じる。[.....] 尖った部分や瘤をもっているものは何でも都合がいいのだが、繊維 (tissu) や組織 (contexture) はどうやってもつかめないのだ⁴⁸⁾。

自然の中に、組織 (contexture) を認める目が働いている。これは『思い出、ノート、内的思考』の中の、1841年始めに書かれたと思われる文章であるが、書くことが完全に知性の領域に入っていることが読み取れよう。

自然とは総合 (synthèse) であるのに、その研究のためには、切ったり分離したり解剖したりしている。それでその全部の部分をあわせて「全体」と呼びたがる——この全体 (le tout) は人工的だ——、つまり自然を犯した上で——その時には内部のつながり (liens) はもう無くなっているわけだが——そこに総合的判断を打ち立てているのだ。[.....] そして、科学、物の関係性の学問、因果の推移の科学、動きの科学、胎生と組成 (articulation) の科学は.....⁴⁹⁾。

「科学は.....」と言いかけるが、言い終えない。この文章は前の引用の直後に書かれている。ここには生あるものの動き、生命循環作用の相互関係性、そして「組成 (articulation)」への視点が見られる。しかし、そういった「科学的」思想については、1841年から42年のフローベールはこれ以上語る言葉をもたない。ここで重要なのは、生命に「組織」性や機構の存在が感じ取られていることであろう。1837年から1842年までの孤独な思索の時期は、身体表象に「組成 (organisation)」が感じ取られ、フローベールが科学の領域を夢想し始めることによって終わると言える。代わって1844年から1846年にかけては、「神経」とその作用構造が、意識され始めたこの命題の論証に大きな保証を与えるようになる。しかしこれはまた、別のテーマである。

以上に見てきたフローベールの軌跡から明らかと思われるのは、どの時期においても、身体という対象認識が、物質／官能、物理的限界／情念の充溢、個体／生命、生命／組成構造といったふたつの対立形で現れ、かつフローベールの視点がその間を観念的に揺れ動いていることである。

フローベールにとって、自然は常に一時的に採択された観念的対立によって言語化されなければならなかった。しかし、観念が矛盾に変えてしまう表象の実態については、未だ言葉にならない統一性についての確信があったように見える。

13歳から始まる文学創造を初期と分けてしまうことは常に任意の業であるが、ともかく初期は単なる主題提起だけではなく、多くの答えもはらんだ時期である。特に、フローベール自身「僕が『完全 (entier)』であった唯一の時期⁵⁰⁾」と呼ぶ1838年から1841年、そしてその軌跡を記した『11月』完成の1842年までは、「身体」認識の観点からひとつのサイクルを成すように思われる。この時期に確立した身体感覚と機能の統一性の確信は、すでに言語外の対象すら示唆するように思われる。自然そのものを対象とし、いかにその対象と自己の認識との間に交流関係をつくるか。この問題は、神経症経験がフローベールを襲うよりも、はるかに以前から存在するものであった。

終わりに：再びフローベールと神経症のテーマについて／初期作品の重要性

若いフローベールの内面において、「身体」の観念及び意識がどのように変容していったか。1837年から1842年の一時期を切り取っただけでも、そこには多くの示唆がある。「身体」が「個」に変われば、その複合性は「身体組織 (organisation)」の観念を導入することに間違いはない。本文で扱った時期以降、フローベールの「個体の複合性への形式」に対する志向はますます強まっていく。ここから、フローベールが「魂と体の間をつなぐ扉⁵¹⁾」と呼んだ「神経」の問題、或いは「神経」組織と感性の連動性の問題が派生すると見られる。フローベールがそこに位置して書いていた、語彙と観念、その背後にある認識体系の変化を知ることはここで大きな重要性を持つてくるであろう。しかし、その動機と結果はあくまでフローベール個人から出発し、フローベール個人に帰着するべきである。

フローベールが生涯『書簡』の中で洩らす身体や医学についての考えは、多くが1844年の神経症発作に関連している。この文献は文学以外の意図に満ち、神経症克服のドラマという自己演出作業も含むため、多くを差し引いて読まなければいけないものだが、ともあれ、『書簡』によるフローベール自身の神経症解釈は「この病気は二つの相反する状態の充足的帰結だった⁵²⁾」に尽きる。発作後1年4ヶ月経った1845年5月13日、アルフレッド・ル・ポワトヴァンにあてた手紙にはこうある。「神経の病気が、僕の人生におけるふたつの状態 (états) に変わり目をつけてくれた⁵³⁾」。どの状態からどの状態へか。生涯にわたり、フローベール自身、それをあらゆる言葉で説明しようとするだろう。誰が見ても否定できない発作の真実は、フローベール内部の戦いに、生理学的・客観的事実という形で大きな保証を与えた。チボーデの言を借りれば、「堅固な主題、技術的・医学的な媒介 (un sujet solide, l'intermédiaire technique et médical)⁵⁴⁾」がそこで与えられたということになる。デュメニルはそうしたフローベールの身体メカニズムの直感について、「個人の自我の中において、生物学が教えるのと同じ同化・異化作用の現象が起こっていることを知っていた」、だからフローベールには「時代を先取りした」科学的見地があったのだ、と手

放しの誉めようである⁵⁵⁾。一方、サルトルはそうした事実に対し、「神経症は既に予知されていた」という精神分析的解釈をほどこした⁵⁶⁾。しかし両者とも、後世から見た意見でありすぎはしないだろうか？

他方、フローベールの試行錯誤は時代の轍を踏んでいるようにも見える。身体 (corps) が「個」の観念に結びつくのは自然であるとしても、生命循環がそこに絡んできた時、生きた体を説明する言語体系の中で魂の入れ物としてのみ機能を果たす身体 (corps) は、その観念の限界に突き当たる。一方、従来の「身体 (corps)」概念に限界が認められたということは、諸科学において、対立や補完の機能としての新しい概念を導入する道を開く。ミッシェル・フーコーは、本質論的「病氣」に代わって19世紀医学に導入された「個体空間」は、「1816年 [=ブルッセイによる『諸定説の再検討』発表の年]における大きな発見」であったとする⁵⁷⁾。フーコーによれば、「生体機構 (organisme)」への志向は、それが医学の定説として確立する以前から、生氣論として、また臨床解剖学の哲理として、時代の「身体」認識の潜在的主要言説であった。言葉を模索する18歳のフローベールに、すでに時代は深く影響していたのか？ここから仮定を編み出すことはいくらかでも出来よう。

「序」で概観したように、フローベールと神経症（フローベールと医学と言ってもよい）というテーマは、心身疾患に関する解釈言語が広義狭義とも多様になるにつれ、それぞれの「時代精神」を吸って膨らみ続けているようである。しかし一方、「人と作品」がこれほどに離れてしまったのは何故だろうか。フローベールに関してはもう何もかも言い尽くされてしまい、作家自身知らなかった事実や、作家が常にその外に身を置いていた学術知識に依拠し、歴史という実体の知れないものを証人として語るしか道はないということだろうか。一方、ある思想世紀或いは、ある認識体系（エピステーメ）の区切りという視点から見ても、決して「時代精神」たらしめた訳ではないフローベールが、そこに何らかの図式的回答を与えることはないだろう。そこが時代認識に体系的な知的表現を与えようとしたゾラやゴンクール兄弟、または時代を下ってデュアメルなどと本質的に違うところである。

ジャン・スタロピンスキーは、昨年10月スイユ社より刊行された新作 *Action et réaction — vie et aventures d'un couple*（『作用と反作用——ある概念対の軌跡』—— 仮訳）において、ミッシェル・フーコー以来濫用された感のある「エピステーメ」概念もしくは、「エピステモロジー」批評に対する明らかな再考の意図をこめて次のように言う。「もし（ある時代に）一定の科学的『言説』が主調言説として存在したなら、その周辺には必ず様々な反議があったであろうし、断続的試行や怪しげな発見が繰り返されていたはずである。全体的に不協和音を奏でるこうした様々な言説も、その折々においてはそれぞれが名声を馳せていたことであろう。これら相反した意見は、しばしば古い観念を新しい語彙を用いて表現したものだった。この多様性は今まで見過ごされることが多かった。理由は簡単である。ある歴史上の一時期に起こった出来事は、その内部にいかに齟齬をきたしていたとしても、完結した総体を成すからである。この総体を、怠惰にまかせて『時代精神』として片づけ、特殊なものとして注目したい (singulariser) という欲求は、常に大きな誘惑である。あたかも、同時期に起こったという事実が物事に統一性を与えるかのよう⁵⁸⁾。」

(第1章「化学の言葉」、46頁)

1969年にモーリス・ナドーが書いた伝記『作家フローベール』の初版前書きはこのような言葉で始まっている。「フランスにおいてフローベールが長い煉獄から解き放たれ、幾多の分野における関心事となっている今、私が昔全集のために書いた18篇の序文をここでもう一度集めて発表するのは、あながち無意味ではないように思われる。私はいかなる命題も論証しようとしてしない。残念ながら、私は哲学者でもなく、社会学者でも美学学者でも精神分析医でも言語学者でもないのだ⁵⁹⁾」。この言葉は、現在においてますます痛切に響くように思う。ナドーの言葉を借りて言うなら、フローベールは、医者でも心理学者でも科学者でも電気磁気の療法者でもなかった。専門家であるとは、日々対象に直かに接して、そこに観察される変容に対処するため逡巡と試行を積み重ねる、ということである。19世紀の実証主義哲学と実験医学はまさにこの点で結びついていた。その意味ではフローベールは何の専門家でもなかったのである。

これらのことを鑑みて、フローベールがその文学製作の過程で科学(医学)の知識を意識的、或いは無意識的に取り入れていたとしても、その描こうとした対象が何であったかをまずもう一度見直し、そしてそれらの知識が、どのような状況のもとに、またどのレベルで取り入れられていたかをまず考察すべきではないか、そのようなアプローチがこれからの神経症テーマ研究の課題ではないだろうか、というのが現段階での結論である。

引用原文及びその出典

(紙面の都合上、勝手ながら仏語との対照が必要とは思われない引用の原文は省略、作品以外に言及したテキストの対応箇所が長すぎる場合ページ数を記載するにとどめた。なお『書簡』からの引用についてはコナール及びプレイヤード両版を参照したが、手紙の日付のみを記載。)

- 1) Maxime Du Camp, *Souvenirs littéraires*, 2 vol., Hachette, 1894 (1882-1883)
- 2) René Dumesnil, *Flaubert; son hérédité, son milieu, sa méthode*, Société d'Imprimerie et de Librairie Française (Lecène et Oudin), 1905
- 3) Jean-Paul Sartre, *L'Idiot de la famille; Gustave Flaubert, de 1821 à 1856*, 3 vol., Gallimard, 1971
- 4) *ibid.*, t. I, p. 61-80
- 5) Michel Foucault, *Naissance de la clinique*, PUF, « Quadrige », 1997 (1963)
- 6) Jean Bruneau, *Les Débuts littéraires de Gustave Flaubert (1831-1845)*, Armand Colin, 1962, p. 8
- 7) *Un Parfum à sentir*, dans *Les Œuvres Complètes de Flaubert t. I (OC en abrégé ci-après)*, Seuil, 1964, p. 66 : « On venait de retirer un cadavre de l'eau [...]; c'était une femme, un bonnet de dentelle avec des fleurs sales lui couvrait la tête, ses habits étaient déchirés et laissaient voir des membres amaigris; quelques mouches venaient bourdonner à l'entour et lécher le sang figé sur sa bouche entr'ouverte, ses bras gonflés étaient bleuâtres et couverts de petites taches noires. [...] Ce corps couvert de balafres, de marques de griffes, gonflé, verdâtre, déposé ainsi sur la dalle humide, était hideux et faisait mal à voir. »
- 8) *La Peste à Florence*, OC, p. 78 : « Etendu sur le lit, le cadavre était nu, et le sang suintait encore de

ses blessures; la figure était horriblement contractée, ses yeux étaient ouverts et tournés du côté de Garcia, et ce regard morne et terne de cadavre lui fit claquer les dents; la bouche était entr'ouverte, et quelques mouches à viande venaient bourdonner jusque sur ses dents; il y en avait alors cinq ou six qui restèrent collées dans du sang figé qu'il avait sur sa joue; puis, il y avait ce teint livide de la peau, cette blancheur des ongles et quelques meurtrissures sur les bras et sur les genoux. »

- 9) Sartre, éd. cit., t. I, p. 99
- 10) *Rêve d'enfer*, OC, p. 94 : « — Un corps? Oh! oui, quelque chose de palpable, qui sente, qui se voit, car je n'ai qu'une forme, un souffle, une apparence. Oh! si j'étais un homme, si j'avais sa large poitrine et ses fortes cuisses... aussi je l'envie, je le hais, j'en suis jaloux... Oh! mais je n'ai que l'âme, l'âme, souffle brûlant et stérile, qui se dévore et se déchire lui-même; l'âme! mais je n'y peux rien, [...] je ne peux pas toucher, je ne peux pas prendre; [...] Oh! que de fois je me suis traîné sur les cadavres de jeunes filles encore tièdes et chauds! que de fois je m'en suis retourné désespéré et blasphémant! Que ne suis-je pas la brute, l'animal, le reptile! »
- 11) Sartre, éd. cit., t. I, p. 246 : « La "matière brute et stupide" [...]. Cette absence du négatif [...] devient, sentie, une âme à l'envers, négation d'une négation qui échappe. »
- 12) *Rêve d'enfer*, OC, p. 99 : « cet esprit pur et aérien, rampant, impuissant et faible devant la morgue hautaine de la matière brute et stupide »; « l'esprit tomba [...] devant la patience du corps. »
- 13) *Mort du Duc de Guise*, OC, p. 45
- 14) *Littré*, t. II, p. 1216-1220
- 15) Blainvilliers, *Réfutation de Spinoza*, *ibid.*, p. 1216 : « Ces corps sont dits unis et composent ensemble un tout de certaine figure, qui est un mode de l'étendue solide, que l'on nomme individu corporel ou suppôt. »
- 16) *Dictionnaire encyclopédique des sciences médicales*, 106 vol., en 5 séries, Masson / Asselin, 1864-1889, t. XX, p. 603 : « Nous n'avons pas à nous occuper ici de tel ou tel corps en particulier, mais du *corps* en général. De ce point de vue, la notion du *corps* se confond avec la notion de la *matière*. Définir le corps en général, c'est donc fournir l'ensemble des caractères fondamentaux, essentiels de la matière. A cette notion, [...] correspondent trois caractères : l'*étendue*, l'*impénétrabilité*, l'*inertie*. »
- 17) *Novembre*, OC, p. 255 : « Je l'[=la mort] ai toujours aimée; enfant, je la désirais seulement pour la connaître »
- 18) *Agonies, pensées sceptiques*, OC, p. 157 : « Chaque fois qu'une mort s'opérait dans [mon] âme, chaque fois que [je] tombai[s] de quelque chose de haut, chaque fois qu'une illusion se défaisait et s'abattait comme un château de cartes, chaque fois enfin que quelque chose de pénible et d'agité se passait sous [m]a vie extérieure, [...], [je] jetai[s] quelques cris et versai[s] quelques larmes. »
- 19) *ibid.*, p. 158
- 20) *ibid.* : « L'autre jour, on exhuma un cadavre, on transportait les morceaux d'un homme illustre dans un autre coin de la terre; [...] Alors nous vîmes l'homme, l'homme dans toute son affreuse horreur. Pourtant une vapeur épaisse qui s'éleva aussitôt nous empêcha pendant quelque temps de bien le distinguer : son ventre était rongé, sa poitrine, et ses cuisses étaient d'une blancheur mate; en s'approchant de plus près, il était facile de reconnaître que cette blancheur était une infinité de vers qui rongeaient avec avidité. [...] Le fossoyeur n'hésita pas; il prit cette chair infecte entre ses bras et l'alla porter dans le char qui était à quelques pas plus loin. Comme il allait vite; la cuisse gauche tomba par terre; il la releva avec force et la mit sur son dos, puis il vint recouvrir le trou. Alors il s'aperçut qu'il avait oublié quelque chose, c'était la tête. Il la tira par les cheveux. C'était quelque chose de hideux à voir que ces yeux ternes et à moitié fermés, ce visage gluant, froid, dont on voyait

les pommettes et dont les mouches lui dévoraient les yeux. »

- 21) Dans la préface, par Lucie Chevalley=Sabatier, des *Souvenirs, notes, pensées intimes*, Buchet / Chastel, 1965, p. 20
- 22) *Novembre, OC*, p. 272
- 23) *ibid.*, p. 275
- 24) *ibid.*, p. 276 : « Enfin, au mois de décembre dernier, il mourut, mais lentement, petit à petit, par la seule force de la pensée, sans qu'aucun organe fût malade, comme on meurt de tristesse, [...]. Il recommanda qu'on l'ouvrît, de peur d'être enterré vif, mais il défendit bien qu'on embaumât. »
- 25) *Souvenirs, notes, pensées intimes, op. cit.*, p. 61 : « je comprends bien que les gens qui jeûnent se régalent de leur faim et jouissent des privations, c'est un sensualisme bien plus fin que l'autre, ce sont les voluptés, les treisaillements, les béatitudes du coeur. »
- 26) *Novembre, OC.*, p. 255 : « je me complaisais dans mon chagrin, je ne faisais plus d'effort pour en sortir, je le savourais même, avec la joie désespérée du malade qui gratte sa plaie et se met à rire quand il a du sang aux ongles. »
- 27) *ibid.*
- 28) *ibid.*
- 29) *ibid.*, p. 260 : « Quelque temps encore, je restai, béant, à savourer le battement de mon cœur et le dernier tressaillement de mes nerfs agités; puis, il me sembla que tout s'éteignait et disparaissait. »
- 30) *ibid.*, p. 261 : « Aux imaginations que je m'étais faites naguère, et que je m'efforçais d'évoquer, se mêlait le souvenir intense de mes dernières sensations et le tout se confondant, fantôme et corps, rêve et réalité, la femme que je venais de quitter prit pour moi une proportion synthétique, où tout se résuma dans le passé et d'où tout s'élança pour l'avenir. »
- 31) *ibid.*, p. 271
- 32) Sartre, éd. cit., t. II, p. 1708, p. 1726-1727
- 33) *Souvenirs, notes, pensées intimes, op.cit.*, p. 54 : « Il y a quelque chose de supérieur au raisonnement, c'est l'improvisation, quelque chose qui juge mieux que le jugement, c'est le tact qui n'est autre que l'inspiration donnée pour des choses physiques, pour la vie active. »
- 34) *ibid.*, p. 66 : « Quand on écrit on sent ce qui doit être, on comprend qu'à tel endroit il faut ceci, à tel autre cela, on se compose des tableaux qu'on voit, on a, en quelque sorte la sensation qu'on va faire éclore — on le sent dans le cœur comme l'écho lointain de toutes les passions qu'on va mettre au jour — et cette impuissance à rendre tout cela est le désespoir éternel de ceux qui écrivent, [...] »
- 35) Cf. Pierre Bergounioux, « Flaubert et l'autre » dans *Communication*, no. 19, Seuil, 1972, p. 44, surtout.
- 36) *Quidquid volueris, OC*, p. 104 : « Il était petit, maigre et chétif, il n'y avait que ses mains qui annonçassent quelque force dans sa personne; ses doigts étaient courts, écrasés, munis d'ongles robustes et à moitié crochus. Quant au reste de son corps, il était si faible et si débile, il était couvert d'une couleur si triste et si languissante, que vous auriez gémi sur cet homme jeune encore et qui semblait né pour la tombe, comme ces jeunes arbres qui vivent cassés et sans feuilles. [...]; ses lèvres étaient grosses et laissaient voir deux rangées de longues dents blanches, [...]. Quant à sa tête, elle était étroite et comprimée sur le devant, mais par derrière elle prenait un développement prodigieux, — ceci s'observait sans peine, car la rareté de ses cheveux laissait voir un crâne nu et ridé. »
- 37) *ibid.*, p. 105 : « S'il eût ouvert la chemise qui touchait à cette peau épaisse et noire, vous eussiez contemplé une large poitrine qui semblait celle d'un athlète, tant les vastes poumons qu'elle contenait respiraient tout à l'aise sous cette poitrine velue. Oh! Son cœur aussi était vaste et immense, mais

vaste comme la mer, immense et vide comme sa solitude. »

- 38) Sartre, éd. cit., t. I, p.196 : « Gustave nous fait voir *une personne* [...], elle est individuée par l'intensité peu commune et la spécification rigoureuse de cet "instinct". »
- 39) *Passion et Vertu*, OC, p. 116 : « Il y avait chez elle tant de feu et de chaleur, tant de désirs immenses, une telle soif de délices et de voluptés qui étaient dans son sang, dans ses veines, sous sa peau, jusque sous ses ongles, qu'elle était devenue folle, ivre, éperdue, et qu'elle aurait voulu faire sortir son amour des bornes de la nature; [...] »
- 40) *Quidquid volueris*, OC, p. 113
- 41) *Passion et vertu*, OC, p. 123
- 42) *Novembre*, OC, p. 250
- 43) *Mémoires d'un fou*, OC, p. 243-244 : « pour celui qui regarde les feuilles trembler au souffle du vent, les rivières serpenter dans les prés, la vie se tourmenter et tourbillonner dans les choses, les hommes vivre, faire le bien et le mal, la mer rouler ses flots et le ciel dérouler ses lumières, et qui se demande : "Pourquoi [...] la vie elle-même est-elle un torrent si terrible et qui va se perdre dans l'océan sans bornes de la mort? [...]" — ces questions mènent à des ténèbres d'où l'on ne sort pas. »
- 44) *Novembre*, OC, p. 253 : « N'usant pas de l'existence, l'existence m'usait, mes rêves me fatiguaient plus que de grands travaux; une création entière, immobile, irrélée à elle-même, vivait sourdement sous ma vie; j'étais un chaos dormant de mille principes féconds qui ne savaient comment se manifester ni que faire d'eux-mêmes; ils cherchaient leurs formes et attendaient leur moule. »
- 45) Sartre, éd. cit., t. I, p. 34-35, p. 138
- 46) *Mémoires d'un fou*, OC, p. 231
- 47) Sartre, éd. cit., t. I, p. 181
- 48) *Souvenirs, notes, pensées intimes, op.cit.*, p. 105-106 : « je veux dire tout. Je saisis et je sens en bloc, en synthèse, [...] tout ce qui pointe ou bosse me va, [...]. Le tissu, la texture m'échappent; »
- 49) *ibid.*, p. 107 : « La nature est une synthèse et pour l'étudier vous coupez, vous séparez, vous disséquez, et quand vous voulez de toutes ces parties faire un tout — le tout est artificiel — vous faites la synthèse après l'avoir déflorée — les liens n'existent plus [...] et la science, la science des rapports des choses, la science du passage de la Cause à l'effet, la science du mouvement, de l'embryologie, de l'articulation... »
- 50) Lettre à Louise Colet, citée dans la préface des *Souvenirs, notes, pensées intimes, op.cit.*, p. 36 : « Je n'ai eu que deux ou trois années où j'ai été *entier* (dix-sept à dix-neuf ans). »
- 51) Lettre à Louise Colet, le 11-12 décembre 1847 : « [...] [l]es nerfs, cette porte de transmission entre l'âme et le corps [...] »
- 52) Citons pour exemple, une lettre à Louise Colet, le 8-9 août 1846, entre autres : « Ma maladie de nerfs [...] en [=de la jeunesse] a été la conclusion, la fermeture, le résultat logique. »
- 53) Lettre à Alfred Le Poitvin, le 13 mai 1845 : « Ma maladie de nerfs a été la transition entre ces deux états. »
- 54) Albert Thibaudet, *Gustave Flaubert*, Gallimard, « Tel », 1935 (1922), p. 11
- 55) René Dumesnil, *Gustave Flaubert, l'homme et l'œuvre*, Nizet, 1943, p. 305 : « il sait que se passent dans le "moi" des phénomènes d'assimilation et de désassimilation exactement comparables, en leur complexité, aux phénomènes que la biologie nous révèle. »; p. 314 : « Cette partie [...] révèle sa méthode et montre que celle-ci est exactement calquée sur la méthode des sciences biologiques. »; et p. 327 : « C'est au contact de son père [...], c'est dans la lecture des médecins philosophes que Flaubert a puisé ces théories. En les formulant dès 1853, n'est-il pas, lui aussi, un précurseur? »

- 56) Sartre, éd. cit., t. I, p. 175 : « la névrose est une adaptation intentionnelle de la personne entière à tout son [=Flaubert] passé, à son présent, aux figures invisibles de son avenir. »; t. II, p. 1729 : « la cassure de *Novembre* est la préfiguration de celle qui aura lieu pour de bon en janvier [18]44. »
- 57) Foucault, *op. cit.*, p. 194 : « Alors, — et c'est là la grande découverte de 1816 — disparaît l'être de la maladie. »; p. 196 : « L'espace de la maladie est, [...] l'espace même de l'organisme. »
- 58) Jean Starobinski, *Action et réaction —vie et aventures d'un couple*, Seuil, 1999, p. 46 : « S'il y eut un "discours" scientifique dominant, il y eut aussi autour de lui des contre-propositions, des tentatives à courte portée, des pseudo-découvertes. Un concert de voix discordantes, qui eurent leur saison de notoriété. Beaucoup de ces voix reprenaient des idées anciennes sous un nouveau vocabulaire. Cette diversité a été souvent méconnue. La raison de cette méconnaissance est assez compréhensible : les événements d'une époque, si contradictoires fussent-ils, forment toujours un ensemble fini, et la tentation est toujours grande de *singulariser* cet ensemble en le réduisant, paresseusement, à une formule simple, à un "esprit d'époque". Comme si le fait d'appartenir à un même moment produisait l'unité. »
- 59) Maurice Nadeau, *Gustave Flaubert, écrivain*, Les Lettres Nouvelles, 1980 (1969), p. 9 : « Au moment où, en France, Flaubert sort d'un long purgatoire et devient l'objet de curiosités très diverses, il ne me paraît pas inutile de réunir les dix-huit préfaces que j'ai écrites pour ses Œuvres Complètes. Je n'y soutiens aucune thèse. Je ne suis en effet ni philosophe ni sociologue ni esthéticien ni psychanalyste ni linguiste, je le regrette [...] »